

ロールシャッハ・エゴ・レジリエンス指標の  
開発の試み

森 千 夏

## **A Pilot Study to Develop a Rorschach Ego-Resiliency Index**

**Department of Psychology, Faculty of Liberal Arts** 

---

Ego-Resiliency (ER) is defined as the dynamic capacity of an individual to modify his/ her modal level of ego-control, in either direction, as a function of the demand characteristics of the environmental context. Questionnaires are primarily used to measure ER, but while they are useful for determining where in the group the subject falls, they are not suitable for a broad understanding of individuality. The purpose of this study was to obtain basic data to enable ER measurements using the Rorschach test, which is classified among psychological tests as a projection method.

The ER89 (the Japanese version of the Ego-Resiliency Scale), the Sukemune- Hiew Resilience Test (S-H resilience) and a Rorschach test were conducted. With six participants in this study, of whom two scored high and two low on S-H resilience. As a result, D score (D and Adj D) =0, V=0, moderate and not excessive Blends, moderate Human Contents, MOR<2, and M-<2 variables were characteristic. Although there was a limitation in that the sample size is very small, we obtained data suitable for creating a Rorschach Ego-Resiliency Index.

近年、レジリエンス (resilience) という用語が心理臨床の領域で頻繁に用いられるようになった。レジリエンスは重篤かつ深刻なリスク (例えば、未熟児で出生した、親が統合失調症である、など) を伴う現場での調査・研究から生まれた概念である (Garmezy & Rutter, 1985)。たとえば、レジリエンス研究の初期においては、親がアルコール依存症や重篤な精神疾患を患っていたにも関わらず、適応的に成人した子どもたちの研究がある (例えば、Garmezy, 1971; Werner, 1989)。

レジリエンス研究は1970年代から始まったとされるが、それ以降、レジリエンスは研究者によってさまざまに定義されている。一例をあげると、「困難あるいは脅威的な状況にも関わらず、うまく適応する過程、能力、あるいは結果」(Masten, Best & Garmezy, 1990) のことである。この定義にも含まれているように、レジリエンスの用語には、①リスクや逆境にも関わらず、②環境に適応できた、というふたつの意味が含まれている (庄司, 2009)。

日本においては、レジリエンスは平たく言って、「困難にもへこたれない心の強さ」といった意味で使われていることが多い。例えば、平野 (2011) は、「ストレスフルな出来事によって傷ついても、そこから立ち直っていく精神的な回復力のこと」と定義している。このように表現すると、レジリエンスに内包されるはずの「リスクや逆境にも関わらず」という意味合いが薄れているように思われる。

そこで、本研究では、リスクや逆境を想定せず、日常的なストレス場面を想定した、エゴ・レジリエンスの概念を取り上げる。

### エゴ・レジリエンスの概念

エゴ・レジリエンス (Ego-Resiliency; 以下ER) とは、Block (1950) が提唱したと言われる概念で、自我弾力性と邦訳される。

ERはレジリエンスとは異なる概念として扱われる。レジリエンスが「挑戦的で脅威的な状況にもかかわらず、成功した適応のプロセス、能力、ま

たは成果 (Masten, Best & Garmezy, 1990)」を指すのに対して、ERは「ストレス状況に直面した時に、ある時には自己を抑制し、またある時には自己を解放して状況に柔軟に対応し適応状態へと向かう自我の調整能力 (Block & Block, 1980)」を指している。この両者の決定的な違いは、レジリエンスがリスクや逆境を経験した時に使われる用語であるという点であり、一方でERは日常的なストレス場面を想定している。

ERは、日々のストレスに直面した時、自我 (ego) を調整し、バランスをとって元の適応状態に戻ろうとする力である。一方に衝動や感情を過剰に抑制する超自我寄りの働きである「オーバーコントロール」と、もう一方に衝動や感情を容易に表出してしまうエス (の快樂原則) 寄りの働きをする「アンダーコントロール」という2つの間を柔軟に調整する力とも言える。オーバーコントロールしがちな人とアンダーコントロールしがちな人がおり、それぞれ、表1のような特徴を持つとされる (小野寺, 2010)。

表1. オーバーコントロールタイプとアンダーコントロールタイプの特徴

オーバーコントロールしがちなタイプ	アンダーコントロールしがちなタイプ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・物事に対し慎重である</li> <li>・がまん強い</li> <li>・根気強く取り組む。簡単にあきらめない</li> <li>・臆病である</li> <li>・素直で従順である</li> <li>・注意深い</li> <li>・計画的に先のことを考える</li> <li>・一人でいることを好む</li> <li>・恥ずかしがり屋で控えめ</li> <li>・思慮深い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由奔放にふるまう</li> <li>・メ切を守らなくても平気である</li> <li>・注目的になろうとする (たとえば、見せびらかす)</li> <li>・活動的である</li> <li>・イキイキとしてエネルギーで元気がいい</li> <li>・食事の時間が日によってまちまちである</li> <li>・気分がすぐ変わり、感情的に不安定である</li> <li>・よく遅刻をする</li> <li>・じっとしていることが苦手</li> <li>・すぐにイライラして怒る</li> </ul>

仕事の締切が迫っている、といったストレスに曝された場合、オーバーコントロールを利かせて課題に取り組み、それが終わったらアンダーコントロールを利かせて開放的な気分に入るというような柔軟な調節ができる

ことが望ましいとされる。人間の目標は、可能な限りアンダーコントロールの状態に置き、必要な時にはオーバーコントロールを利かせることにあると言えるかもしれない (Block & Kremen, 1996)。このような自我の調節ができる人はego-resilientであると言い、これが困難な人はego-brittleであると言う。

### エゴ・レジリエンスの測定

ERの測定はQ分類法によって行われてきた歴史がある。Q分類法とは、強制選択式で被検者にカードを並び替えてもらうことで個人の内面を測定する手法である。

Block (1961) は、100項目のパーソナリティや性格を表す文章を抽出し、これらのリストをCalifornia Adult Q-set (CAQ) と命名した。CAQの各項目が書かれた計100枚のカードを、1 (全くあてはまらない) から9 (かなりあてはまる) のいずれかのカテゴリーに正規分布を描くように並び替えてもらう。1や9に分類されるカードは少なく、より中立的な5に分類されるカードは多くなるように、1=5枚、2=8枚、3=12枚、4=16枚、5=18枚、6=16枚、7=12枚、8=8枚、9=5枚 (計100枚) になるように並び替えてもらうのである。この時、どこに並び替えるかの評定を行うのは、研究スタッフや教師、知人、あるいは被検者自身であったりする。そして、各カードの評点と、種々の研究から明らかになったアンダーコントロールおよびエゴ・レジリエンスのプロトタイプとを比較する。その人の性格特徴と2種のプロトタイプとの類似値、すなわち相関係数が算出され、この手法により得られた得点を“プロトタイプ由来得点”と呼ぶ。Q分類法にはさまざまな評定者が必要になり、なかなか時間と手間のかかる検査法である。

そこで、90年代になると、Q分類法に代わって、自己記述式の質問紙によりERの測定が行われるようになった。

## 質問紙によるエゴ・レジリエンスの測定

Klohn (1996) は、Q分類法で測定される結果と近似するような自己報告尺度を作成し、最終的には29項目とした。また、Block & Kremen (1996) は、ERの自己報告尺度として、14項目のER89を作成した。その後、ER89を用いた研究が多数報告されている（例えば、Alessandri et al., 2007; Waugh et al., 2008; Waaktaar, 2010）。その他にも、いくつかの質問紙が作成されている（表2）。

表2. エゴ・レジリエンスを測定するための質問紙（奥上ら, 2018を改変）

名称	作成者	項目数
California Psychological Inventory	Klohn (1996)	29
ER89	Block & Kremen (1996)	14
ER89-R	Alessandriら (2007)	10
ER11	Farkas & Orosz (2015)	11
ER89日本語版	畑・小野寺 (2013a)	14
CAQ Ego-resiliencyプロトタイプ定義	Klohn (1996)	26
CAQ版ER尺度	中尾・加藤 (2005)	16
CCQ Ego-resiliencyプロトタイプ定義	Kwok, Hughes, & Luo (2007)	15
Ego-resiliency尺度	Kwok, Hughes, & Luo (2007)	7

## 日本におけるエゴ・レジリエンス研究

日本においてERに関する論文は極めて少ない（畑・小野寺, 2014）のが現状である。これまでにERを取り上げた研究を一覧に記す（表3）。

これらの研究においてERの測定は、ER89日本語版（畑・小野寺, 2013a）やS-H式レジリエンス検査（祐宗, 2007）によって行われていることが多い。これら質問紙は、その人の集団の中に占める位置を知るためには有用である。その一方で、幅広くその人の個性や内面を把握するにはあまり向いていない。小川ら（2011）は、①文章の意味が理解できない、②自分自身の内面を内省できない、③正直に答えないといい人がいることから、質問紙法には限界があるとし、本人も気づいていない捉えにく

いパーソナリティの側面を捉えようとする投映法の意義について述べている。本研究においては、量的分析がしやすく、自己統制や感情の抑制／発散などに関するパーソナリティに係る広汎な情報を得られることから、投映法の中でもロールシャッハ・テスト（以下ロ・テスト）を用いる。

表 3. 日本におけるER研究の一覧

文献	研究テーマ
小野寺 (2008)	ERと母親の養育態度との関連
小野寺 (2009)	青年期の親子関係と無気力感の關係にERの果たす役割
畑・小野寺 (2009)	ERとタイプAおよび身体的ストレスの関連
中尾・加藤 (2005)	CAQ版ER尺度作成の試み
畑・小杉・小野寺 (2011)	ERと唾液中クロモグラニンAを指標とした心理的ストレスとの関連
畑・小野寺 (2013a)	大学生の自我同一性地位と精神的健康の關係にERの果たす役割
畑・小野寺 (2013b)	Ego-Resiliency尺度 (ER89) の日本語版作成と信頼性・妥当性の検討
畑・小野寺 (2014)	ER研究の展望
小島ら (2015)	ERと心的外傷後成長のメンタルヘルスとの関連
奥上 (2018)	ERの自己報告式尺度についての展望
土田 (2018)	自閉スペクトラム症リスクの高い大学生のERの検討
河野・小野寺 (2019)	ERと高齢者のライフスタイルタイプの特徴の検討

### ロールシャッハ・テストにおける特殊指標

包括システムに準拠すると、ロ・テストには6つの特殊指標がある（表4）。ひとつは、S-CONと略される「自殺の可能性を示す布置」であり、これはロールシャッハ・テスト施行後60日以内に自殺既遂した人々と似通った特徴を持つ人々をあぶりだすために作られた。包括システムに準拠したロールシャッハ・テストの解釈では、はじめにS-CONの値を見ることになっている。

包括システムで測定される指標には、ほかにも、PTI（知覚と思考の指標）、DEPI（抑うつ指標）、CDI（対処力不全指標）、HVI（警戒心過剰指

標), OBS (強迫的スタイル指標)がある。これらは,その人の病理的なパーソナリティ特性を検出するのに有用であり,これらに該当があれば,その人のパーソナリティの中で中心的な役割を果たす特徴を見出すことができる。

表 4. 包括システムにおける特殊指標

略称	名称	邦訳
S-CON	S-constellation; Suicide Potential	自殺の可能性を示す布置
PTI	Perceptural-Thinking Index	知覚と思考の指標
DEPI	Depression Index	抑うつ指標
CDI	Coping Deficit Index	対処力不全指標
HVI	Hypervigilance Index	警戒心過剰指標
OBS	Obsessive Style Index	強迫的スタイル指標

これらの指標には,いくつかの決められた変数が含まれており,各指標において該当した変数の数が指標得点となる。HVIとOBSは,基準を満たすかどうかYesかNoかで示す。

これらの指標は,いずれもパーソナリティの病理や問題を明らかにするために使われ,医療や教育,司法矯正のような臨床の現場でロ・テストを用いる際には有用である。しかし,一方で,こうした臨床の現場に関わるニーズのない,いわば一般の人たちにはあまり関係がないかもしれない。ERのような,個人のポジティブな特性を測定しようとする指標を作成することにより,ロ・テストをより一般の人たちに使用することができるようになると考えられる。ちなみに,海外においても,ERをロ・テストを用いて測定しようという研究は今のところ見当たらない。

#### エゴ・レジリエンスと関連がありそうなロールシャッハ・テストスコア

ER89日本語版の項目は以下の通りであり,ストレスや困難に際して立ち向かっていく心理的な資質や対人関係を立て直す力,感情のコントロー



ル、好奇心などが扱われていると捉えることができるだろう。これらに対応するであろうロ・テストのスコアには、EA, EB, eb, D, Adj D, Lambda, GHR:PHR, Isolation Index, COP, S, Ma:Mp, MOR, Blend, FC:CF+C, Afr, C', CPなどがある。

表 5. ER89日本語版（畑・小野寺，2013a）の項目

- 
- 1 私は友人に対して寛大である。
  - 2 私はショックをうけることがあっても直ぐに立ち直るほうだ。
  - 3 私は慣れていないことにも楽しみながら取り組むことができる。
  - 4 私はたいいてい人に好印象を与えることができる。
  - 5 私は今まで食べたことがない食べ物を試すことが好きだ。
  - 6 私は人からとてもエネルギッシュな人間だと思われる。
  - 7 私はよく知っているところへ行くにも、違う道を通っていくのが好きだ。
  - 8 私は人よりも好奇心が強いと思う。
  - 9 私の周りには、感じがよい人が多い。
  - 10 私は何かするとき、アイデアがたくさん浮かぶほうだ。
  - 11 私は新しいことをするのが好きだ。
  - 12 私は日々の生活の中で面白いと感じることが多い。
  - 13 私は「打たれ強い」性格だと思う。
  - 14 私は誰かに腹を立てても、すぐに機嫌が直る。
- 

また、S-H式レジリエンス検査は3因子構造が確認されており、第1因子はソーシャルサポート、第2因子は自己効力感、第3因子は社会性と命名されている（祐宗，2007）。ロ・テストにおいて自己効力感を直接測定するスコアは見当たらないが、ソーシャルサポートについてはIsolation Index、社会性についてはPopularが関連がありそうである。これらERと関連がありそうなロ・テストのスコアを一覧に記す（表6）。

表 6. ERと関連がありそうな口・テストのスコア

項目	対応する口・テストのスコア
心理的な資質	EA, EB, eb, D, Adj D, Lambda
対人関係	GHR:PHR, Isolation Index, COP, S, H+A>Hd+Ad
感情	FC:CF+C, Afr, C', CP
知覚や認知	Ma:Mp, MOR, Blend, XA%, WDA%, X+%, X-%, Xu%
社会性	P

本研究の目的は、ERを口・テストによって測定できるようにするためのパイロット・スタディを行うことである。今後さらなる研究を重ねていくことで、Rorschach Ego-resiliency Index（以下RER指標）を作成することが最終的な目的である。

## 方法

**検査** 質問紙は、ER89日本語版（畑・小野寺，2013a）およびS-H式レジリエンス検査（祐宗，2007）を用いた。ER89日本語版は14項目に4件法で回答を求める方法であり、S-H式レジリエンス尺度は、パート1のみを使用し、27項目に5件法で回答を求めるものであった。ロールシャッハ・テストは包括システムに準拠して施行し、整理した。

**調査時期と手続き** 2019年8月～9月にA大学の学部生および大学院生の中から研究協力者を募り、協力を得られた6名（22.00歳，SD1.10）に調査を行った。調査を行う際には、研究の目的や参加の自由、倫理面の配慮について口頭及び文書で説明し、同意を得られた人のみを本研究の対象とした。質問紙2種は自己記入式で回答してもらった。なお、テスト結果は後日、雇用した臨床心理士によってフィードバックする予定とした（図1）。

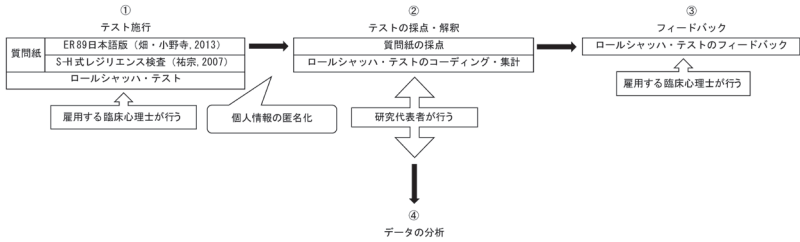


図 1. 研究の流れ

**倫理的配慮** ロ・テストは、テスト施行者と研究協力者が1対1で行う個別式の心理検査である。研究代表者は、教育者としても研究協力者である学生と関わりがある可能性があり、多重関係を防ぐため、第三者がテストを施行する倫理的配慮が必要である。そのため、第三者である学外に所属する臨床心理士を雇用した。雇用した臨床心理士によるテスト施行後、個人情報をも特定できないようにした状態で研究代表者がデータを受け取り、結果の集計や分析、解釈を行った。個人情報の記された対応表は雇用した臨床心理士のみが閲覧できるように厳密に管理した。なお、本研究は聖心女子大学の倫理委員会の承認（研究倫理審査申請番号：2019\_21）を得たうえで実施された。

## 結果

**質問紙** ER89日本語版の平均値は36.00 (SD5.22) であり、ERの水準は「かなり高め」と判定される値であった（表7）。6名中5名が「かなり高め」と判定され、1名が「どちらともいえない」と判定された。また、S-H式レジリエンス検査の合計得点の平均値は102.17 (SD12.61) であり、「普通」と判定される値であった。個別に見ると、「高い」、「普通」、「低い」と判定された者がそれぞれ2名ずついた。

ER89とS-H式レジリエンス検査ともに高い水準であった者が1名、どちらも低めの水準であった者が1名おり、他の4名には一貫した傾向が認

められなかった。

表7. 質問紙の平均値 (SD) と判定

尺度名		平均/SD	判定*
日本語版	合計得点	36.00 5.22	かなり高め
S-H式レジリエンス検査	ソーシャルサポート因子	51.33 5.61	普通
	自己効力感因子	33.00 6.42	普通
	社会性因子	17.83 2.48	普通
	合計得点	102.17 12.61	普通

\*ER89は「極めて高め」「かなり高め」「どちらともいえない」「かなり低め」「極めて低め」の5段階中。

S-H式レジリエンス検査は「高い」「普通」「低い」の3段階中。

S-H式レジリエンス検査とロールシャッハ・テストのスコア S-H式レジリエンス検査の合計得点で、「高い」と判定された者と「低い」と判定された者のロ・テストのスコアの特徴を比較した。結果の一覧を表8に記す。

表8. S-H式レジリエンス検査で「高い」と「低い」に判定された者のロ・テストのスコアの特徴

S-H式レジリエンス検査の判定	
高い	低い
D= 0	D=+2
Adj D=0	Adj D=+3
V=0	V=1
Blend<4	Blend>4
Human Content<6	Human Content>6
MOR<2	MOR>2
M-<2	M->2

解釈をするうえで意味のある特徴がみられたスコアは、ストレス耐性に関連するDスコア（DおよびAdj D）、自責の念あるいは否定的な内省に関連するVista（V）、心理的な複雑さに関連するBlend、対人関係にどのくらい興味を持っているかに関連するHuman Content、否定的な認知の構えに関連するMOR、不適切な思考内容に関連するM-だった。

**S-H式レジリエンス検査の因子ごとの特徴** S-H式レジリエンス検査の3つの因子ごとに見ると、ソーシャルサポート因子で「普通」と判定された者は4名、「低い」と判定された者は2名いた（表9）。自己効力感因子で「高い」と判定された者は2名、「普通」と判定された者は1名、「低い」と判定された者は3名いた。社会性因子で「普通」と判定された者は5名、「低い」と判定された者は1名いた。

表9. S-H式レジリエンス検査の因子ごとの判定結果

	高い	普通	低い	
ソーシャルサポート因子	1	4	1	
自己効力感因子	2	1	3	
社会性因子	0	5	1	(名)

この中で特徴的であると考えられる自己効力感因子の「高い」と判定された者と「低い」と判定された者の口・テストのスコアの特徴を比較したところ、「高い」と判定された2名は、もともと持っているストレス耐性を示すAdj Dが0であったのに対し、「低い」と判定された3名はこのスコアがプラスであった。

### 考察

ER89においてERが高い水準であると判定された者が、S-H式レジリエンス検査においてはERが低い水準であると判定されることがあった。同じERを測定しているはずのふたつの質問紙においてこのような差異が生

じるということは、このふたつの尺度は実はそれぞれ異なるERの側面を測定しているのかもしれない。この両者の質問紙の間の相関研究や、奥上(2018)が指摘するように、ERの次元性を明確にするようなさらなる研究が必要であろう。

S-H式レジリエンス検査の合計得点において、ERの水準が「高い」と判定された者と「低い」と判定された者のロ・テストのスコアを比較したところ、いくつかの解釈上意味のある違いが認められた。ふたつのDスコア(DおよびAdj D)はストレス耐性を示しているが、「高い」と判定された者はこの値が0と適応的な数値であった。「低い」と判定された者はいずれもプラスの値であり、対社会的に前向きに頑張れる、困難があっても踏ん張れる可能性がある。しかし、これは必ずしもポジティブな結果とは言えず、ふたつのDスコアの期待される値はあくまでも0である。Dスコアがプラスであるということは、ただ、行動を自分の意志で統制する力がより多く備わっていることを示しているに過ぎない(中村・野田, 2009)。ストレスや困難があっても我慢したり、それが大変だとは感じないように感情を封じ込めたりするので、疲れや自分の感情に鈍感になったり、ストレスが身体化されやすかったりするという弊害も生じうる。本研究の結果からすると、このようなストレスの取り扱い方は、ERが低いことと関連しているようである。Dスコアがプラスになる人は、オーバーコントロールしがちであり、時と場合によってアンダーコントロールにも切り替えるような柔軟性が乏しい。一方で、Dスコアが0であることは、ego-resilientであることと関連があると考えられる。

S-H式レジリエンス検査の合計得点が「高い」と判定された者にはVista(V)はなく、「低い」と判定された者にはひとつあった。Vistaは、自責の念や否定的な内省と関連があり、抑うつ指標(DEPI)の中で重要な構成要素である。自分自身にネガティブな感情を向けている人に見られる。「低い」と判定された者にVistaが見られたということは、ERが低い人は肯定的な未来展望を持つことができず、自分のネガティブな面にばかりとらわ

れてしまい、時に落ち込むこともあると考えられる。こうした固定的な態度はERの低さと関連があり、VistaのないことはERの高さと関連があると考えられる。

心理的な複雑さに関連するBlendに関しては、S-H式レジリエンス検査で「高い」と判定された者のほうがその値が少なかった。このことは、ERが高い人は、ひとつの出来事に対して一面的な経験や処理を示すことを示しており、ERが物事に柔軟に対応する力であることを考えると矛盾がある。今後の検討課題である。

対人関係にどのくらい興味を持っているかに関連するHuman Contentも、S-H式レジリエンス検査で「高い」と判定された者のほうが少なかった。このことは、ERが高い人は他者にはあまり関心を寄せず、対人接触にやや回避的な傾向を示していると考えられる。このことも、ERの高さとは矛盾しており、さらなるデータ収集が必要である。

否定的な認知の構えに関連するMORは、S-H式レジリエンス検査で「高い」と判定された者において少なく、「低い」と判定された者において多かった。MORが多いということは、自分自身や出来事、未来の予測にネガティブな捉え方をしやすいことを示している。ERの低い人は、問題が起こる前から何か悪いことが起きるのではないかと考えやすいと考えられる。ERの高い人にはそのような傾向はみられなかった。

ERの高い人と低い人で、現実検討力を示すXA%、WDA%、X+%、X-%、Xu%、社会性や常識度を示すPなどに差は認められなかったが、M-には差が見られた。不適切な思考内容に関連するM-は、S-H式レジリエンス検査で「高い」と判定された者に少なく、「低い」と判定された者に多く見られた。M-は少ないほどよく、これが多いということは、思考が現実離れしていたり混乱していたりすることを示す。ERの低い人は、社会の中で人と話を合わせたり、現実をなるべくゆがめず的確に捉えたりすることが難しくなることがあると考えられる。ERの高い人にはそのような傾向はみられなかった。

S-H式レジリエンス検査の因子別に見ると、自己効力感因子には個人差がみられた。自己効力感因子は、目の前の課題をやり通すだけの自信につながる能力を今までにどの程度身につけているかを測定している（祐宗，2007）。これが「高い」と判定された者は、本来のストレス耐性を示すAdj Dが0であり、適応的であることを示唆している。一方で、自己効力感因子が「低い」と判定された者はAdj Dがプラスの値であった。ストレスや困難を前にしてもそう簡単に困ったりへこたれたりしないが、やり通せる自信があるわけではないことを示している。課題に直面した時、自信はないながらも何とかその場をしのぐ、ということを日常的に繰り返していると、本当に困ったときに誰かに助けを求めることができなかつたり、こなしてきた経験に見合うほどの自尊心が育たなかつたりするだろう。そうした状態は、ストレスや困難に弾力性をもって対処する力であるERが高いとは言えず、心理的な辛さをほどよく自身で引き受けて困ってみたり、自力ではどうしようもないと思ったら人に頼ったりするほうが柔軟性のある状態である。

以上の知見を踏まえると、RER指標には、Dスコア（DおよびAdj D） $= 0$ 、 $V = 0$ 、過剰でない適度なBlend、ほどよいHuman Content、 $MOR < 2$ 、 $M - < 2$ といった変数を含むのがよいかもしれない。今後の研究を待つ必要があるが、これらの変数のうち、いくつに該当するとERが十分高い、などと判定できるようにしていくことが必要である。

臨床的な応用を考えれば、これらの変数をもとに、例えば、Dスコアがプラスの人には、オーバーコントロールしがちであるのでもう少しアンダーコントロール寄りになってもいいこと、つまり、ふっと気を抜いたり一息ついてみたり、頑張るのをやめてみたりするとよい、ということをおアドバイスすることができるようになる。MORのように、すぐには変化が期待できないスコアもあるが（Exner, Armbruster, & Viglione, 1978）、MORが多い、すなわち必要以上に悲観的に考えやすい特徴があるという自己理解を深め、そのうえでストレスに対処していく方略を練るようサ



ポートすることはできるだろう。

ERは衝動や感情のコントロール力と関りがある。本研究からは、ふたつのDスコアのように、衝動のコントロールに関わる特徴を見出すことはできたが、感情のコントロールに関わるような、FC:CF+C, Pure C, C', CPなどのスコアに特徴は見出せなかった。本研究においては、ロ・テストにおいて感情の発散が控えめなタイプがS-H式レジリエンス検査においてERが高かった傾向があったためかもしれない。

本研究の限界として、サンプル数がごく少ないことが挙げられる。そのため、ロ・テスト上に現れる個性の違いが大きく結果に影響したと考えられる。今後はサンプル数を増やし、質問紙とロ・テストのスコアとの相関関係を調べたり、ERが高い群と低い群とで統計学的な解析ができるようにする予定である。そして、最終的にはRER指標という、ポジティブな指標を作成する。

## 引用文献

- Alessandri, G., Vecchio, G., Steca, P., Caprara, M. G., & Caprara, G. V. (2007). "A Revised Version of Kremen and Block's Ego-Resiliency Scale in an Italian Sample". *Testing, Psychometrics, Methodology in Applied Psychology*, 14, 1-19.
- Block, J. (1950). "An Experimental Investigation of the Construct of Ego-Control". Unpublished Doctoral Dissertation, Stanford University, Stanford, CA.
- Block, J. (1961). *The Q-sort method in personality assessment and psychiatric research*. Consulting Psychologists Press, Palo Alto, CA.
- Block, J. H., & Block, J. (1980). "The Role of Ego-Control and Ego-Resiliency in organization of behavior." In W. A. Collins (Ed.), *Development of Cognition, Affect and Social Relations: The Minnesota Symposia on Child Psychology*, 13, 39-101.

- Block, J. & Kremen, A. M. (1996) "IQ and Ego-Resiliency: Conceptual and Empirical Connections and Separateness." *Journal of personality and social psychology*, 70 (2), 349-361.
- Exner, J. E., Armbruster, G., & Viglione, D. (1978). "The Temporal Stability of Some Rorschach Features." *Journal of Personality Assessment*, 42, 474-482.
- Farkas, D., & Orosz, G. (2015). "Ego-Resiliency Reloaded: a Three-Component Model of General Resiliency." *PloS one*, 10 (3), e0120883.
- Garnezy, N. (1971) "Vulnerability Research and the Issue of Primary Prevention." *American Journal of Orthopsychiatry*, 41 (1), 101-116.
- Garnezy, N. & Rutter, M. (1985). "Acute Reactions to Stress." In M. Rutter & L. Hersov (Eds.), *Child and Adolescent Psychiatry: Modern Approaches*, 152 -196. London: Blackwell Scientific Publications.
- 畑 潮・小杉 幹子・小野寺 敦子 (2011). 「唾液中クロモグラニンAを指標とした心理的ストレス反応とエゴ・レジリエンスとの関連」, 『目白大学心理学研究紀要』, 7, 67-80.
- 畑 潮・小野寺 敦子 (2009). 「エゴ・レジリエンスとタイプA行動パターンとの関係について」. 『目白大学心理学研究紀要』, 5, 107-116.
- 畑 潮・小野寺 敦子 (2013a). 「Ego-Resiliency尺度 (ER89) 日本語版作成と信頼性・妥当性の検討」, 『パーソナリティ研究』, 22, 37-47.
- 畑 潮・小野寺 敦子 (2013b). 「大学生のエゴ・レジリエンスと自我同一性および精神的健康の関係」, 『目白大学心理学研究紀要』, 9, 37-51.
- 畑 潮・小野寺 敦子 (2014). 「エゴ・レジリエンス研究の展望」. 『目白大学心理学研究紀要』, 10, 71-92.
- 平野 真理 (2011). 「中高生における二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の妥当性—双生児法による検討」. 『パーソナリティ研究』, 20 (1), 50-52.

- 河野 理恵・小野寺 敦子 (2019). 「高齢者のライフスタイルタイプの解明, 及びその特徴の検討」. 『目白大学心理学研究』, 15, 39-51.
- Klohn, E. C. (1996). "Conceptual Analysis and Measurement of the Construct of Ego-Resiliency." *Journal of personality and Social Psychology*, 70 (5), 1067-79.
- 小島 雅彦・藤澤 隆史・小泉 径子・青井 利哉・水島 栄・友田 明美 (2015). 「青年期のメンタルヘルスに関する調査 (2) エゴ・レジリエンスおよび心的外傷後成長のメンタルヘルスとの関係」. 『子どもの心と脳の発達』, 6 (1), 31-41.
- Kwok, O., Hughes, J. N., & Luo, W. (2007). "Role of Resilient Personality on Lower Achieving First Grade Student' Current and Future Achievement." *Journal of School Psychology*, 45, 61-82.
- Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990). "Resilience and Development: Contributions from the Study of Children Who Overcome Adversity." *Development and Psychopathology*, 2 (4), 425-444. <https://doi.org/10.1017/S0954579400005812>
- 中村 紀子・野田 昌道 (2009). 『ロールシャッハ・テスト 包括システムの基礎と解釈の原理』. 金剛出版.
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2005). 「CAQ版ER尺度 (CAQ-Ego-Resiliency Scale) 作成の試み」, 『パーソナリティ研究』, 13 (2), 272-274.
- 小川 俊樹・高橋 依子・津川 律子・中村 紀子・馬場 禮子・寺沢 英理子 (2011). 「投映法のこれから」. 『包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌』, 15 (1), 12-43.
- 奥上 紫緒里・西川 一二・雨宮 俊彦 (2018). 「エゴ・レジリエンスの構成概念について: 自己報告式尺度の概念」. 『関西大学社会学部紀要』, 49 (2), 1-26.
- 小野寺 敦子 (2008). 「ego-resilienceが母親の養育態度に与える影響」. 『目白大学心理学研究紀要』, 4, 25-34.

- 小野寺 敦子 (2009). 「親子関係が青年の無気力感に与える影響」. 『目白大学心理学研究紀要』, 5, 25-34.
- 小野寺 敦子 (2010). 『メゲない人のポジティブ心理学 前向きになれる自分のつくりかた』. PHP研究所.
- 庄司 順一 (2009). 「レジリエンスについて」. 『人間福祉学研究』, 2 (1), 35-47.
- 祐宗 省三 (2007). 『S-H式レジリエンス検査』. 竹井機器工業株式会社.
- 土田 弥生 (2018). 「自閉スペクトラム症リスクの高い大学生の適応要因の検討：アスリート大学生と非アスリート大学生の差異に注目して」. 『田園調布学園大学紀要』, 13, 191-204.
- Waaktaar, T. & Torgersen, S. (2010). “How Resilient are Resilience Scales? The Big Five scales Outperform Resilience Scales in Predicting Adjustment in Adolescents.” *Scandinavian Journal of Psychology*, 51 (2) , 157-163.
- Waugh, C. E., Wager, T. D., Fredrickson, B. L., Noll, D. C., & Taylor, S. F. (2008). “The Neural Correlates of Trait Resilience When Anticipating and Recovering from Threat.” *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 3 (4) , 322-332.
- Werner, E. (1989). “High-Risk Children in Young Adulthood. A Longitudinal Study from Birth to 32 years.” *American Journal of Orthopsychiatry*, 59 (1), 72-81.

## 謝辞

本研究にご協力くださった研究参加者のみなさま、並びにテストの施行を引き受けてくださった北村 朱先生、高村 遥先生に心より感謝申し上げます。